

苦しみの起こる原因の共通表現

—— Āyāraṅga-sutta と Suttanipāta ——

渡 辺 研 二

1. はじめに

ジャイナ教では一般に善業 (puṇya-karman) は楽しみ (sukha) を生ずる手段であり、悪業 (pāpa-karman) は苦しみ (duḥkha) を生ずる手段であると考えていた。つまり悪業から苦しみが生ずるとみなしていた。またジャイナ教徒は業を一種の微細な物質と見なしていた。普通、人間は迷いに支配されて行動している。その結果、業が身体の内部に流入し (soya), 業物質が靈魂に付着し、「業の身体」(kamma-sarīra) と称する特別の身体を形成し、その結果として靈魂を昏らまし、束縛している、と見なしているのである。したがって不道德な行為は苦しみをもたらすものであるが、そればかりではなくて、人間の行為そのものが、結局、やはり苦しみをもたらすのである。仏教では「一切皆苦」を根本説とするが、ジャイナ教もすべての生きものたちの苦しみを強調する。両教共に苦しみに関する認識は共通である。

その苦しみの起こる原因を示唆する表現が、ジャイナ教と仏教の古い聖典に書かれている。

2. ジャイナ教と仏教の共通表現

Āyāraṅga-sutta 1.3.1.3 (p. 13, l. 22)

= Āyār. 1.4.3.1 (p. 19, l. 14) = JAS 108, 140

ārambhajaṃ dukkhaṃ iṇaṃ

この苦しみは活動から生ずる。

(筆者訳)

Suttanipāta 744

yaṃ kiñci dukkhaṃ sambhoti, sabbam ārambhapaccayā, ārambhānaṃ nirodhena n'atthi dukkhassa sambhavo.

およそ苦しみが起こるのは、すべて起動を縁として起こる。諸々の起動が消滅す

(230)

苦しみの起こる原因の共通表現（渡 辺）

るならば、苦しみの生ずることもない。

（中村元訳）

テキストの ārambha を筆者はシュブリング教授の訳にならって「活動」と訳し、中村先生は、おそらく語源から見て「行為の開始」というような意味から「起動」と訳されていると思われる。

3. ārambha について

さて、ジャイナ教の『アーヤーランガ・スッタ』と仏教の『スッタニパータ』に現れる苦の原因ともとれる ārambha はどのような意味の言葉であろうか。

3.1. ジャイナ教文献から見た ārambha

ジャイナ教聖典の古い部分には「生類に暴力を加える」という表現 *daṇḍam (sam) āraṃbhai*, 「暴力的行為に着手する, 従事する」という意味であるが, その動詞 *āraṃbhai* を引き継いでいる動詞的名詞 *ārambha* はジャイナ教の古層聖典, 特に『アーヤーランガ・スッタ』の一部に単体で 12 回現れる。

また, この語は『スーヤガダ』においては *pariggaha* (Skt. *parigraha*, 所有, 獲得) と一組となって現れることが知られている。共に, 在家者の抑制されない生活の特長として記述されている。例えば *iha khalu gāratthā sārambhā sa-pariggahā* (Sūyagaḍa. 2.1.43-44 = JAS 677) 「ここで, 実に活動 (*ārambha*) と所有 (*pariggaha*) をともなう在家者たちは」。また, *ārambha* は, 一般人の日常の必要悪の行動, 活動を意味している。*pāvāvagā ya ārambhā* (Sūyagaḍa. 1.8.7 = JAS 417) 「悪をとまなっている活動」つまり日常の生活に必要な活動のことを意味している。このような日常の活動は, 最初は, 感官の対象に向かっていき, その結果, 最終的に欲望の満足に向けられていくようになる。聖典に, *agiddhe sadda-phāsesu ārambhesu anissie* (Sūyagaḍa. 1.9.35 = JAS 471) 「声・触において貪欲でなく, 活動に加わらない。」とある。さらに, この世の生きものたちが, 日常において常に活動していることが聖典に残されている。

māhaṇā khattiyā vessā, caṇḍālā adu bokkasā

esiyā vesiyā suddā je ya ārambha-nissiyā. (Sūyagaḍa. 1.9.2 = JAS 438)

バラモン, クシャトリヤ, ヴァイシャ, チャンダーラ, ブックサ, 獵師, 商人, シュードラたちは, 活動するのを習慣としている。

3.2. 仏教文献から見た ārambha

ārambha は梵語の辞典には「着手, 企画, 開始」などと意味が示されているが,

原始仏教を研究するうえで大切な経典『スッタニパータ』を翻訳した有名な学者たちは、*ārambha* をそれぞれ「起動」（中村元）、「悪行」（榎本文雄），“*exertion*”（K. R. Norman）、「企て」（並川孝儀）、「功をあせること」（渡辺照宏）、「勤労」（村上真完・及川真介）、「労苦」（宮坂宥勝）、「妄動」（萩原雲来）などと訳している。それぞれの訳語は興味深いものがあるが、とくに榎本先生の訳「悪行」はジャイナ教の学者のブルーン先生（Klaus Bruhn）のジャイナ教における *ārambha* の訳 “*evil act*” と呼応していて興味深い。この訳はジャイナ教の聖典の伝統的な注釈者の解釈と一致するのである。一方、『アーヤーランガ・スッタ』の翻訳をした西洋の学者は *ārambha* を “*Betätigung*”（W. Schubring），“*action*”（H. Jacobi）と共に「活動」と訳している。

さらに、ここで取り上げた『スッタニパータ』744 を含む 728 から 744 までの記述について、解説書を著わした並川孝儀先生（『スッタニパータ——仏教最古の世界——』）は「ここでは、苦しみの原因が相互に連鎖したものとして説かれていないが、偈の順序を考慮に入れると、後に説かれる十二支縁起を想起できる」と指摘されている。「つまり、苦しみが起こる原因を、生存のよりどころ（となる根源的執著＝無明）→行為の潜在的な力→識別作用→接触→感受→妄執→執着→生存→生まれ→死→企て→食すること→動揺、と連鎖的に捉えているようにも理解できる。」と指摘しておられる。加えて、「仮に十二支縁起にない「企て」以下を除いて両者を比較すると」（154 頁）として各支分の要素をそれぞれ比べている。ここで「企て」と訳されている語は *ārambha* である。しかも十二支縁起にない術語であることから、仏教における十二支縁起の成立以前の古い伝承ではないかとも考えられる。

この *ārambha* はジャイナ教の綱要書である『タットヴァールターディガマ・スートラ』VI 章 9 には *saṃrambha*, *saṃārambha*, *ārambha* と同類の三つの術語が併記され、それぞれ意味は、「企画、準備、着手」（金倉円照）である。これは以下に取り上げるジャイナ教聖典の古層における *ārambha* の用例をまとめたものではないかと推測できる。

4. 『スッタニパータ』における (sam)*ārambha* について

(sam)*ārambha* の本来の意味を反映している用例が『スッタニパータ』に残されている。

Suttanipāta 311

(232) 苦しみの起こる原因の共通表現 (渡 辺)

tayo rogā pure āsumḥ icchā, anasanañ, jarā,
pasānañ ca samārambhā aṭṭhānavuti-m-agamam

昔は、欲と飢えと老いという三つの病いがあっただけだった。ところが諸々の家畜を祀りのために殺したので、九十八種の病いがあった。(中村元訳)

それまで、『わずらい』と言え、欲望、飢え、老いの三つのみであった。だが、動物の犠牲が始まると、九十八種もの『わずらい』が襲いかかってきた。(本庄良文訳)

(sam)ārambha の本来の意味は中村訳にあるように、「家畜を祀りのために殺した」、または本庄訳に、「動物の犠牲が始まると」、に明確に見られるように、(sam)-ārambha の本来の意味は、動物犠牲の行為に関するものであった。

5. ジャイナ教古層聖典の例

次のジャイナ教の最古の聖典に見られる六生類に対する暴力に関する (sam)-ārambhamāṇassa ... ārambhā の組み合わせの表現もまた (sam)ārambha の本来の意味を反映しているに違いない。

Āyār. 1.1.2.6 (p. 2, l. 31)

ettha sattham (sam)ārambhamāṇassa icc-ee ārambhā aparinnāyā bhavanti, ettha sattham asamārabhamāṇassa icc-ee ārambhā parinnāyā bhavanti. tam parinnāyā mehvā n'eva sayam puḍhavi-sattham samārabhejjā n'ev' annehim puḍhavi-sattham samārambhāvejjā n'ev' anne puḍhavi-sattham samārabhante samañujāñejjā. jass' ee puḍhavi-kamma-samārambhā parinnāyā bhavanti, se hu muṇi parinnāyā-kamme—tti bemi.

ここで、道具を使って活動しつつある人にとって、そのような活動が「害をもたらすものとして」熟知されていない。道具を使って活動しない人にとって、そのような活動が「害をもたらすものとして」熟知されている。この活動が「害をもたらすものとして」熟知している賢者は、自ら、地に対して道具を使って、活動すべきではないし、他をして活動させるべきではないし、他が活動しているのを容認すべきではない。地に対する行為の活動を「害をもたらすものとして」熟知している人にとって、その人は、「害をもたらす」行為を熟知している聖者である。とこのように私は言う。

samārabhamāṇassa の動詞 sam-ā-√rabh と名詞 ārambhā は関係があると推測される。

sam-ā-√rabh は動作を開始することを意味する動詞で、次のように使われる。

Āyār. 1.8.1.5 (p. 33, l. 28–p. 34, l. 5)

... mehvā ca n'eva sayam eehim kāehim daṇḍam samārabhejjā, n'ev' annehim eehim kāehim daṇḍam samārambhāvejjā, j'ev' anne eehim kāehim daṇḍam samārabhante vi samañujāñejjā. ... daṇḍa-bhī daṇḍam samārabhejjāsi—tti bemi.

賢者はこれらの諸々の身に対し、決して自らダンドを開始すべきではない。他の者たちをして、これら諸々の身に対し、決してダンドを開始させるべきではない。これら諸々

の身に対してダンダを開始しつつある他者たちを、決して容認すべきではない。…ダンダを恐れる者は、ダンダを開始しない。

ここにいう、ダンダを開始する、ということは暴力をふるうということを、意味している。

6. 結びにかえて、インド思想における「活動」について

ツインーマン教授は論文「菜食主義と非暴力についてのノート」で、『チャラカ・サンヒター』においても、「活動」(pravṛtti)と「非活動」(nivṛtti)という古来の強固な対立が見出される。「活動」とは、世俗的な企てや行動に向かうものであり、「非活動」とは「禁欲」つまり解放、解脱である。」と『チャラカ・サンヒター』身体篇、第五章、第八節に述べておられる。そして『チャラカ・サンヒター』を引用して、

世俗的世界の、そして一切の苦悩の根源、それが「活動」である。一方それらの停止が「非活動」である。「活動」は不幸であり、「非活動」は幸福である。（赤松明彦訳）

tasya mūlaṃ sarvopaplavānāṃ ca pravṛtṭiḥ, nivṛttiruparamaḥ/
pravṛttir duḥkhaṃ, pravṛtṭiḥ sukhaṃ iti, yajñānam utpadyate tat satyam//
(Caraka-saṃhitā, Śarīrasthānam 5.8)

ここに述べられている「活動」(pravṛtti)が ārambha と同じ内容の術語であろうと思われる。つまり、本論で指摘した苦の原因としてジャイナ教と仏教に共通して現れる ārambha とは、世俗的な企てや行動に向かうものをいうのであろう。それが現実世界の中で、苦しみを生み出すものとなっている、という主張であろう。苦が日常の何気ない行動、活動から生ずるという考えはジャイナ教、仏教の両教に原初的な宗教的動機となったことは想像に難くない。

〈参考文献〉

- Ācārāṅga-sūtra*. Text, Analyse und Glossar von Walther Schubring. Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes 12 (4). Leipzig: Brockhaus, 1910.
Worte Mahāvīras: Kritische Übersetzungen aus dem Kanon der Jain. Von Walther Schubring. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1926.
Āyārāṅga-suttam. Edited by Muni Jambuvijaya. Jaina Āgama Series, no. 2 (1). Bombay: Śrī Mahāvīra Jaina Vidyālaya, 1976.
Jaina sutras. Translated from Prākṛit by Hermann Jacobi. Part I, *The Ākārāṅga sūtra, the Kalpa sūtra*. The Sacred Books of the East, vol. XXII. Oxford: Clarendon Press, 1884.
Sūyagaḍaṃgasuttam. Edited by Muni Jambuvijaya. Jaina Āgama Series, no. 2 (2). Bombay: Śrī

(234) 苦しみの起こる原因の共通表現 (渡 辺)

- Mahāvīra Jaina Vidyālaya, 1978.
Jaina sutras. Translated from Prākṛit by Hermann Jacobi. Part II, *The Uttarādhyayana sūtra the Sūtrakṛitāṅga sūtra*. The Sacred Books of the East, vol. XXII. Oxford: Clarendon Press, 1884.
Sutta-nipāta. Edited by Dines Andersen and Hermer Smith. London: The Pali Text Society, 1913.
Caraka-saṃhitā. Edited and Translated by Priyavrat Sharma. Vol. 1. Varanasi: Chaukhambha Orientalia, 2005.
 梶山雄一ほか『ブッダの詩 I』原始仏典第七巻, 講談社, 昭和 61 年所収『スッタニパータ』の榎本文雄訳および本庄良文訳.
 中村元訳『ブッダのことば——スッタニパータ——』岩波文庫, 1984 年.
 並川孝儀『スッタニパータ——仏教最古の世界——』書物誕生, 岩波書店, 2008 年.
 フランシス・ツィンマーマン (Francis Zimmermann) 著, 赤松明彦訳「菜食主義と非暴力についてのノート」『現代思想』1994 年 6 月号.
The Word of the Doctrine. Translated by K. R. Norman. Oxford: The Pali Text Society, 1997.
 渡辺照宏『仏教聖典』一, 渡辺照宏著作集第 5 巻, 筑摩書房, 昭和 57 年.
 村上真完・及川真介訳注『仏のことば註』春秋社, 1985 年.
 宮坂宥勝訳『ブッダの教え』法蔵館, 2002 年.
 萩原雲来訳注『法句経』岩波文庫, 昭和 10 年.
 金倉円照『印度精神文化の研究』培風館, 昭和 19 年.
 Bruhn, Klaus. "The Mahāvratas in Early Jainism." *Berliner Indologische Studien* 15/16/17 (2003).

〈キーワード〉 ārambha, 苦, ジャイナ教, 仏教

(大正大学非常勤講師)